集落営農が稲作の生産および費用に与える影響：大規模稲作経営のシミュレーション分析

齋藤 経史[*]　大橋 弘[†]　西村清彦[‡]

本論文では農林業センサスを用いて 2000 年の 42 府県において、約 192 万戸の稲作農家に代わって約 12 万の農業集落が実質的な経営単位として機能した場合に稲作の生産や費用に与える効果を定量的に評価する。サンプルセレクションおよび区間形式のデータに対応した手法を用いて稲作の生産関数を推定し、シミュレーションによって集落営農の効果を分析する。

分析の結果、2000 年において 5.04 兆円を費やしていた稲作の生産費用（機会費用を含む）は集落営農による大規模経営を行うことによって 1.97 兆円へと約 61%削減できることが分かった。また、2000 年の個別農家による生産では、約 1.5%の農家しか採算がとれていないが、集落内で上位 10%の生産性を持つ農家が集落営農を主導すれば、約 11%の農業集落にて採算がとれることが明らかとなった。集落営農は我が国の稲作の赤字構造を包括的に解決するわけではないが、収益性を大幅に改善することが示された。

[*] 科学技術政策研究所
[†] 東京大学 経済学研究科
[‡] 日本銀行（本研究への主要な貢献は、日本銀行政策委員会のメンバーになる前になされた。）

本論文の作成にあたり、藤田昌久所長、森川正之副所長をはじめとする経済産業研究所のセミナー参加者から有益なコメントを頂いた。ここに記して、感謝を申し上げる。